

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

関連前兆静穏化傾向 第4期前兆群 現状 12月29日±を示す

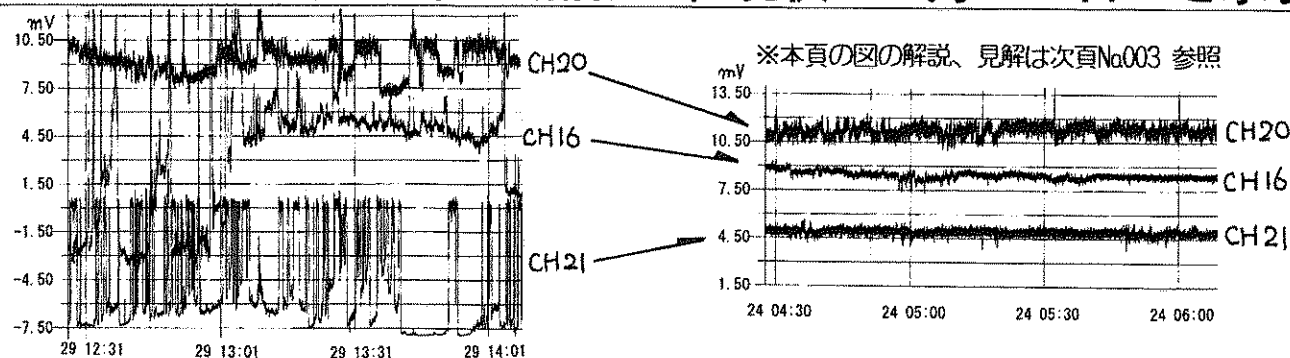


図-1) 八ヶ岳の複数観測装置の特異状態も静穏化傾向
左上の様に顕著な特異状態だったCH16, 20, 21も上のとおり静穏化傾向へ。特に振切顕著なCH16は、11/3, 11/12と2段階で静穏化。但し、上記基線もまだ断続的に弱い特異状態を記録する。

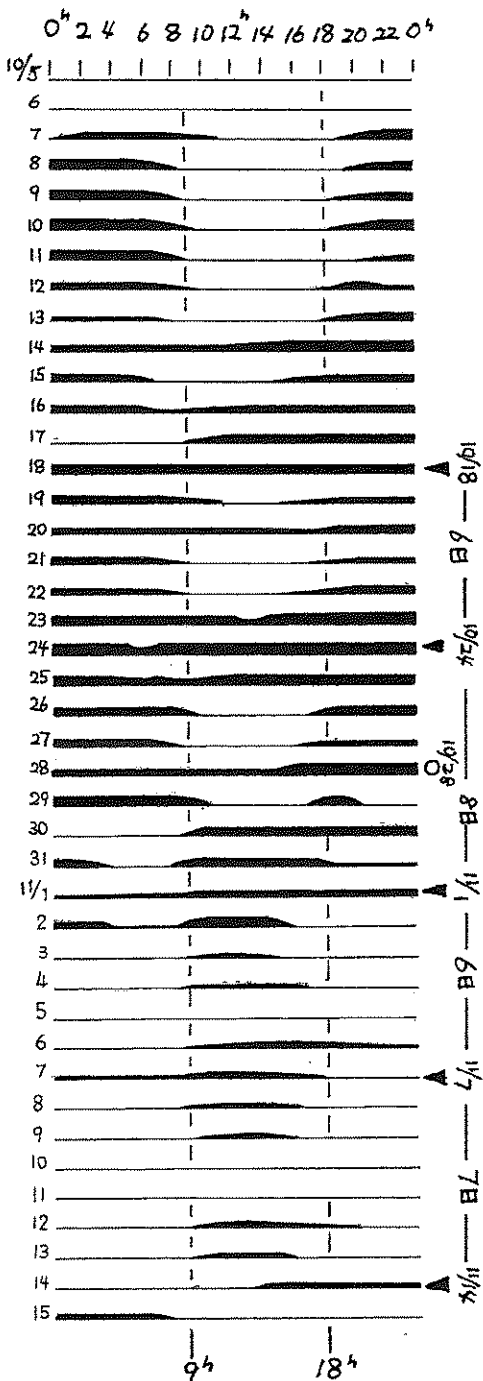
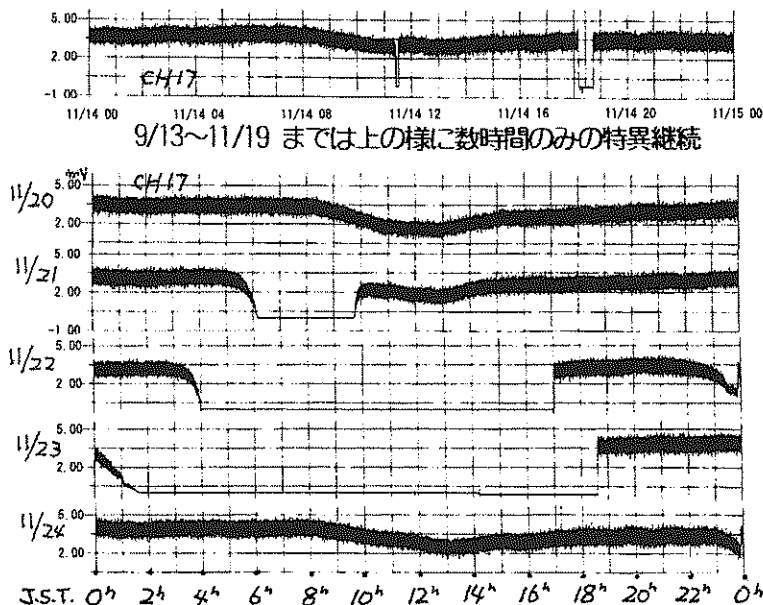


図-2) 左図 2012/10/7~11/15 出現の八ヶ岳CH7 基線幅増大BT
日々変化スケッチ図(11/16以降終息) 地震発生時刻=午前9時±or午後6時±

横軸一本が一日。左端=00時、中央=12時、右端=00時とし、日々の時間変化基線幅増大値をスケッチ。◀印の長時間BT出現(基線幅増大値には関係無い)をとると、周期的出現に見える。平均周期=6.8日。○印の10/28は周期性に合わない。周期性に合わない長時間BT出現日に平均周期の6倍値又は9倍値を加算すると、地震発生日±3となる経験則有。10/28+(6.8×9)=12月28日±となる。

図-3) 下図 八ヶ岳のCH17に長時間糸状特異出現(11/23)

9/13~11/19までは、下図一番上基線の様に一日に数時間程度の特異断続的出現。しかし、11/22-23は12時間以上継続糸状特異。一番長時間糸状特異出現の11/23が5/25極大に対する直前特異の可能性も有。Tmap: Tpa=6:1⇒12月29日±



原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
 Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

関連前兆静穏化傾向 第4期前兆群 現状12月29日±を示す

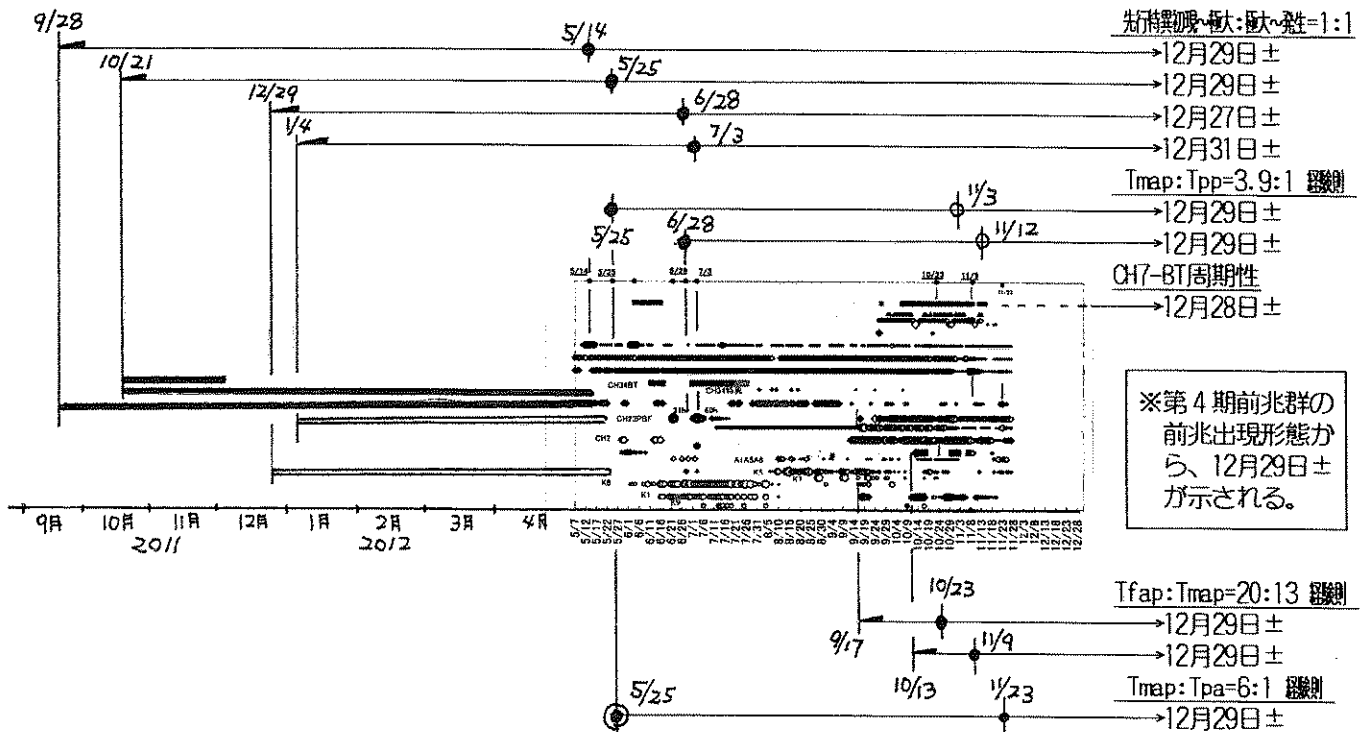


図-4) No.1778前兆 第4期前兆群の前兆出現状況と、出現形態の時間変化経験則から示される「発生推定日」

PHP新書「地震予報」2012年11月刊行の中で書きました、長期前兆No.1778についての続報です。

2012年05月から第4期前兆群ステージ認識です。上図のとおり、2012年10月中に多数の観測装置に前兆出現が観測され、前兆レベルの山を記録しました。その後は前頁図-1)のように、前兆が静穏化傾向となった観測装置が多く、10月中最大17~18観測に出現していた前兆も、現在は6モニター前後となり、断続的かつ微弱化しています。

第4期前兆群には、現在までに、5/25、6/28、10/23、11/9の4個の極大が認識されます。2008年07月から出現しだしたNo.1778前兆は、PHP新書記載のとおり、第1期~第4期(現在)まで4段階の前兆群出現が観測されています。第1~第3期前兆群には各々12個の極大が観測されました。

しかし、現在の第4期前兆群には、前述のとおり4個の極大しか認識できません。明らかに現在の第4期前兆群は、それまでの第1~第3期前兆群とは様相を異にしています。また、第4期前兆群の最初の極大には、各々第3期前兆群出現期間中から、先行特異が出現していた可能性もあります。これも第1~第3期前兆群には見られなかった現象です。これらのことから、現在の第4期前兆群が示す時期(第1~第3期前兆群が示した各時期は実際の地震発生日ではなく、次の前兆群の初現又は最初の極大日となっていました)が、次の第5期前兆群の初現又は極大を示して、さらに前兆が長期に渡り継続出現して、実際の地震発生は2013年以降である、と云う可能性は考えにくい見解です。現在の第4期前兆群が最終段階である可能性が考えやすいのではないかと考えています。

現在の第4期前兆群が示す時期は、12月29日±です。この時期が、実際の対応地震発生時期となる可能性が考えやすい状況です。但し、12月29日±時期に実際の地震発生となる場合には、12月下旬には前兆が終息する可能性が示唆されますので、これを確認することが最終判断となります。12月下旬時期に前兆が顕著継続していた場合は、第5期前兆群に突入して、継続する可能性も否定はできません。

前頁図-2): CH7の基線幅増大BT変化図が示す、日々のBT出現、または終息時間帯は、午前9時±と午後6時±の2回が確認できます。このどちらかの時間帯が実際の地震発生時刻となる可能性が示唆されます。どちらかと云うと午前9時±の時間帯の方が午後6時±より揃って見えますので、午前の時間帯の方が可能性は考えやすい。

前頁図-3): CH7の糸状特異。11/23の様な12時間以上継続する糸状特異出現は2ヶ月以上ぶりの出現。この特異を極大に対する直前特異(PHP新書/地震予報P-304上から2番目参照)である可能性ががあります。直前特異~発生=Tpaとし、極大から発生=Tmapとしたとき、Tmap:Tpa=6:1の経験則がある。ちなみに、前述11/23が5/25極大に対する直前特異である場合は、次の極大6/28に対する直前特異=11/29±が推定されます。前兆自体は、現在までの最終極大11/9に対して、静穏化時期は12月17日±と計算できますので、この時期までは少なくとも現在の前兆が継続する可能性が示唆されます。また続報します。